

報會



昭和六年一月二十三日發行

号六第年二第

熊の湯行

十二月三十一日

まるでスキーの林だ。静かなること林の如きその林がワ〜ワ〜と云ふ人声と一しよにプラツトフオームを走る、走る。

細棚の隅から隅までがリュックサツノだ。

午後十時五分上野原不定期列車はスキー列車だ。その中にもまれて僕達五人、見送り五人。汽笛が鳴つて、東京よ、暫く、さよふらだ。そして一九三〇年よ、永久に、さよふらだ。

一月一日

ゴトンと止つて眼がさめる耳許に駅夫がつようかんしと馬鹿に甘つたるい呼声と思つたら横川だった。

寒硝子の水蒸気を袖で拭ふと丁度売店そばの前の、大勢が推しかける、ブルドッグの様なスキー靴、ま深いスキー帽。此の深夜に勇技ふる黒服

焼。おし合ひ、へし合ひ、配給品のうばひあひだ。白い毛絨の帽子の姫御前まで滴々しく大口開けて召し上つてゐる。だが此のそばやさん、こんふに売れたが儲かつたらうか、損したらうか。勿論近ちやんがその客であつたと云ふ事を問題外にして、

沓打の茶屋の前の噴水は落ちる時に氷とぶつて外へ外へと重つて十重二十重の美事ぶ氷柱とぶる。口を漱いで鼻嚢をたべると始めてスキーぶまでもふい詰備ふ足馴し。

丸池近くまで黒く垂れてゐた雲も幕岩邊りからハラ／＼雪を降りす。平床の原を吹きつけて来る中をあえぎ／＼行きふがらも、雪の少い今は何でと降つて明日を樂しみ度いと思ふ。

一月二日

淡峠へと三人五人また五人三人と四組か五組向ふ一番最後で近ちやんが振りかへつて見る雲のされ間にやつと光る妙高の諸の寫真をとらうと苦心してゐた。

横つつりを過ぎてすぐ淡峠へ近づくと、左手は笹の急傾斜、右はそのまゝのびて谷深く落ちてゐる。

ズシン！と近くの様でもあり遠く大砲の音でもある様だ、たゞ一度の音響。皆で顔見合せてお

そるおそる見廻したる、三四間上の十坪にも余る雪の重みを堪へられずドンと落して道が危く支へたその響だ。一条気味悪い裂け目が走る。一人一人そつと通り過ぎてから、あのシヨツクがもつと大きかつたりとゾツとする。

横手山の頂上ではまだ雪が降り続く。幾組が来た群も草津へ下りたり、峠から引かへしたりして僕達の組と外一組におつた。天氣がよくても此の山の眺望はあまりきかぬと云ふ。蜜柑をたべて、寫真をとれば後は愉快な滑降の連続だ。さあ、行こう。

一月三日

足を痛めた近方やんを残して四人で出た。宿の前の川を渡つて高みへ出るとサツと横ぶぐりに吹きつける。さう云へば昨夜はこの吹雪を豫想してか宿では雨戸や硝子戸の隙間を目張りしてたつて、雪は絶好の粉雪だ。赤石山へ行くつもりで草津峠へ向ふ四人。今日は外に誰もゐなかつた。

草津峠の北に突起する鉢山を百米ばかりで登りきつて海豹の皮をとる。少し行くと誰が来たのか三四人のシユプールがある。雪は降る。先は見えぬ。何處から登つて来たのか分らぬシユプール、何度も地形と地図と磁石とを見ながら見當がつかぬ。免に角シユプールについて少し行くことにする。と右手で人声がして一昨日赤石山に行つて、七時

頃宿に歸つて来た京大の連中だ。聞けばこれから先は藪が出てゐて相當時間がかゝると云ふ。相談してこの雪ぢや何も見えずつ行つても仕様がわからうと引きかへす。前来た跡をたどる。何時までも元来た跡を行く中に何だか先刻一度引歸して来た所とよく似た所に出る。変だ、可笑しい、と思つてゐる中に別れた京大の人とまた會ふ。聞くと鉢山の頂上に池がある、その周囲を一周してもこの所へ来たのでせうと云はれてスツカリ笑つちやつた。降り口を聞いて草津峠に向ふ。鉢山つて変な所だ。

一月四日

好い天氣になつた。下りるに惜しい。朝九時宿を出て丸池の小屋の上に来た時は雪はクラストしてゐるが眺めは素敵だ。見える。見える。右に妙高、火打、次が島田結はせた黒姫山だ。中絶、飯綱、遠い白馬の銀嶺、杓子、鍾。双頭の鹿嶋鍾は一きわ高い。佐美さんや磯野君達はどうだったかしら、針の木が大きい。

あゝ、あの左の端に尖つてゐるのは槍だ。ペン

熊の湯宿の日記

ほんとに永い間待ちに待つた時が来た。停車場で孫さんの顔が見えふい。どうしたのかと聞いて見ると過日赤色々物凄いな事を云つて驚か

して置いたので彼すがり恐れをふしとの事である。今度の彼の不参加は彼のために幸であつたか、いふ断じて然らず。不幸の極みと云ふ可し。口は物凄くけれどペン公も謙坊も僕もいざとあるとても親切である。と云ふ事を彼は知りおかつたのである。

今度にはペンちゃんがとても大食主義を發揮した。列々三日の夜消化不快にあつた。うまい貝柱の饅頭もみす／＼見送り位容体が悪かつた徳本峠以来の弊病である。可憐なる少年村尾君は遂に年末の持病のために倒れたのである。

次に謙坊と来ては是亦物凄きものである。あの頑健鉄の如き胸の中に乙女の如き愛らしき志を秘めて朝ふ夕べに滑る可く運命付けられて戻る現在の彼を嘆いて居るのである。

正に鬼のつかランである。

所がです茲に驚く可き事実を熊の湯行は携えて歸つて来たのです。

それは要ちゃんも二月早々結婚式を挙げる事でありす。其の電光石火的運命の轉廻は謙坊をして「後の鳥先におり」と嘆声を發せしめたのも無理はふいのです。

而も要ちゃんも直情径行亦吾人一行を嘆せしめずには置きません。謙坊ペン公が既に要ちゃんとは奥様にあまいぞ／＼と攻めたでるので僕は可愛

想に思つて「いや要ちゃんの様お人は案外奥さんには嚴しいものだ」と肩を持つてやると御當人要ちゃん曰く「それでもよいよ」

「うへー救けてくれ」是が一同の悲鳴である。此の「それでもよいよ」の一言は完全に一同を屈服せしめてしまつたのです。

何んでも近所の娘さんで幼馴染といふと深く「あらま、要ちゃん!! いや要二様!!」どちへしてお工合にいと睦しく恋の花が咲いて實が結んだ理である。誠に御芽出度い限りである。

愈々最後に一言僕自身の事を書かねばならぬ。それは実に不可思議な事である。風邪のため後頭部の皮膚が一部非常に痛んで一寸でも障ると癢上る位痛んだ居た。所が波峠の小屋の入口の横木に目から火が出る位前頭部を打ち付けて目まいを起し気が付いて見ると後頭部の皮膚の痛みが治つてしまつて居た。實際あんふ不思議な事はふい。何処か物知りがあつたら醫學的に説明してもらひ度いものである。

狸

來ぬのが不幸か幸か

ゲレは言ふ。フスキーと靴を買はなければ解らぬ。いよ、龜さんは言ふ「どうだかし、トン公は云ふ、つどたんばにおつて見なければ解らぬいよ」併し幸にして人のいゝ俺は絶好の好機だ、蓋し七

兵衛御大將の勇姿を熊の湯の雪原に見るを思ふた。

あの真剣そのもの、様ふ顔に言ひしれぬ、涙の出

る様ふ、張りきつた面構を思ひ浮べて微笑してゐ

たのだが彼は遂に来なかつた。彼の言を惜りるふ

らば一騎当千おど小せえ／＼。その彼を合宿に見

おかつたのは淋しかつた。彼さへ居れば吹雪の吹

き込む千五百米の山の中だつてラヂオおんて要り

はしおい。お目出度い落語おんて聞くより遙に面

白い、へお陰で翌日は寝方したかも知れおいが

併し彼にして見れば宿に歸つては座布団の二三枚

も敷かされてお茶を入れて貰つてへ併し蒲団の時

の廟子までは出るぬだらうが、大事にされても雪

の上の事を考へるとぞつとしたかも知れおい。第

一上林からは三里もスキーはかつがなければふり

おいだらう。そして一日位稽古すればいやでもお

うでも二、三〇〇米の横手の上までは引っぱり上

げられるだらう、併し向題は下りだ。皆いゝ氣に

下つて笑つてゐるかも知れおい。そして歸りには

最早慣れたらうつてんで曲りくねりの多い志賀高

原を滑らせられおまけにナメツ坂もスキーをぬぐ

事は禁じられるだらう。

こう考へて見ると来おかつた彼は蓋し幸だつた

かも知れおい。だが彼は遂に永久にスキーを知ら

三角

ウルトラモダン美容術

熊の湯から歸つて早々我が親愛するペンちゃん

近ちやんの二人が原因不明の奇怪なる噴出物に悩

まされて大いに弱つたと聞く。

殊にペンちゃんのように顔面組織に大変革を来し

して、原形を止めぬ迄に至つたと云ふ。

そして俺と謙ちゃんには別条おい。一夜皆おで

原因を尋ねて見たが二人とも特に悪戯をした覚え

は無い相である。

然し俺は嚴然たる科学の立場より真相の探究に

努めた所、此処に如何も怪しい存在がある。それ

はペンちゃん持参せる所の「タコペン」"カニパ

ン"。ふる俗縁を有する物品である。俺は幸か不幸

かその名称を聞き知るのみで該物件の如何なる形

態内容を有するやは知らしむが何でも横手へ行つ

た時二人で大半を平げて了つた相である。然し尻

尾の方を食べた近ちやんは軽く済み最も毒の猛烈

な頭部を占領したペンちゃんは一自分乍ら情けお

い姿に成つた相なり。

然し斯く云つたからとて諸兄よペンちゃんを哀

れむ必要は無い。

富嶽の秀麗な姿も幾度かの噴火を経て後の事で

ある。我が親愛するペンちゃん亦然り。一皮むい

た彼氏が如何にトキシヤンにふつた事が、俺の言

葉を疑ふ前に、先づ彼の御メンソウに得と御眼止

められよ。

ヘチマ

一九三〇年は今日で終るのだ。考へて見れば随分御無沙汰したものだ。然し格別申し訳し無いとも済まおいても思つては居ない。出来おし事は致方がないからだ。然し言葉の上では十分に謝意を表して置かねばおあいとは思つてゐる。それは禮儀だからだ。

久し振りで昨日奥野兄に會つた。相変わらず元気だつた。もう親父におつたさうなのに、山の事はかり云つて喜んでゐる。ボーナスやサラリーの少おいのは一尙問題であいらしい。成る程結構お極楽トンボだ。不景氣おんで東京の山の連中の仲間では問題じゃおいらしい。

所がこちらには不景氣、不景氣、不景氣おんだ。朝から晩まで、不景氣と追つかけてごつこをやつてゐるんだ。景氣觀測、經濟調査おんで本當に不景氣お商賣おんだ。御陰で此一年、山からも山の仲間からも殆んど全く隔離されてしまった。離れて行つたのではおい離されたのだ。自ら好んで御無沙汰した訳でもおければ、山より不キートホームの方がよりチヤームフルだつた故では不幸にして更ら更らおい。あらゆる意味に於ける經濟的お压迫が十重二十重に俺を困んだからだ。仕事は多忙だと云ふよりもむしろ圧倒的だつた。

嘗つて最も輕視したものを、今は最も重大視しおければおらおい。此の根本的お問題の變化が、不當に俺の勢力を消耗せしめたのだ。經濟界にだつてデングバールお問題はあるんだ。然し無限に、確かにそれは俺の前に展開して来た未知の世界であり、新たお活動領域おんだ。然しこの世界はあまりにも不可解お、然しあまりにも無価値お、然しそれであつて、あまりにもわずらはしい存在おのだ。俺は此の世界を克服したいと思つた。俺は、この世界のカラクリを一刻も早く見透す事によつて、それをアーフヘーベンしようとおせつてゐるのだ。然しあせればあせる程、増々深みへ沈下して行くのをどうする事も出来おいでもがいてゐるのだ。俺は動いてゐる。俺は生きてゐる。そして俺は嘗つての學生時代のそれに倍回する熱意を以て勉強してゐるんだ。山へ行き度いおあー、東京の仲間はどうしてゐるだらうー、そう思ひおがら。そうして山へ行く暇と金とをもうけるために、此の秋こそは、が此の冬こそはにふり、来年こそはがやがで、何時かはに変わるかも知れおい。ああ山へ行く日の遠くおつた事だ。だけれど、まだ諦めたのではおい。思ひ切つたのではおい。恐らく諦められたらもつと幸福だつたらう。欲望を零にして満足を最大おらしめる方法が最も安価で、そうして安月給取り向きの相

違ふい、だけど俺はもう諦める事も断念したんだ。それは無理だ。ダンスやマージャンで山を忘れられる人間は、此度俺より幸福な奴に違ひない。スチートホムの方が山よりい、と思へる奴に至つてはグリツクリツヘルだ。

せかれ、ばせかれ程恋しさが募る様に、道ふりぬ恋に陥つた少年の様に、俺の心は矢張り山の影を追ふてゐるんだ。此の世のあらゆる享樂の中で、山遊びに優るもの、ふいを俺は今におつて漸く治つた様ふ気がしてゐる、そうして此の気持は何時山のことばかり話し、山へばかり行つて居られる様ふ階級の人間には到底味はれそうもおい事を御注意申し上げて置く。

東京の仲間の社會にも随分度つた事が多いだらふと思ふ、然し大阪の仲間の事ですら知りぬ事の方が多い俺の事だ。諸君の興味の中心にある様ふ面白いトピツクが何であるかは知り得べくもない、何を書いてよいのやらまるで分からぬ。一九三〇年の最後の日だ諸兄の幸福を祈つて筆を擱こう。

(一九三〇、一二、三一、E、J)

山男と常識 (其の二)

二、又文章に就いても「轉倒を含んでの直滑降」その他二つばかりに關係して「これでは文章について免や角いふ資格のよい私でも少々ひどいと思

はざるを得ない」としてある。私の持論から云へば酒落も冗談も理解出来おい様ふ人も矢張り常識のよい部類に這入る事にあるのである。

三、次に「山はのぼ、んと登るべきものではおい」と云はれる、元来山登りも一つの趣味である、趣味である以上どんな風ふ登り方をしやうとそれを判別する様ふ原則はおい筈だ、のぼ、いんとは何と考へずいんといふ意味である、何も考へずに登れるかといふ屁理窟も出せうだが私はそれにまで答へる意志もおい、勇氣もおい、又それ程人もよく出来上つて居りぬ。

四、最後に「學窓を出て一二年にして過去の自分を清算し本を出すのは尚早である」と仰せられる。然しこれは人の勝手である、學窓に居る内に出版しやうと、出でからあはて、書かふと二三十年たつて悠々出さうとそれは各自の自由であつて外部から免や角そんな事を云はれる覚えはおい。「余計な御世話だ」と云ふ言葉は、ういふ時によく使はれる。

然し誤植へ次に就いても多少の云ひ誤はある、悪文章、不注意その他確かに悪い所は素直に御詫びしてもいい。

私ははじめから登山界の先輩や所謂御歴々に読んで貰ひたひ為に書いたのではおい、山が好きでスキーが好きで、山の本が好きだといふ人達に読

んで賞ひ度かつた。勿論御偉い人々の讀むのは勝手である。「吾人屁理窟を知らず」といふ様ふつゝ氣分の人々に讀んで貰へれば充分だと考へて居る。要するに少くとも山の本の批評といふものは大抵の山の先輩が云はれた様にその実質乃至は本質といふ様ふものを主眼とせられ度いといふのが私の衷心からの希望であるのだ。

熊

(前原稿の次に一のあるのを無くして済みません)

係り

神津牧場と荒船山

大正十年晩春、妙義から望んだ荒船山の怪偉ぶ山容と最近一橋山岳部員及針葉樹會員諸氏の神津牧場についての数々の物語とは非常ふ力とあつて彼をグイ／＼へ引きつけてしまつた。それで十一月一日夜の氣象通報は甚芳しくあつたにも不拘、三日は昔から降つた事がよいといふ記憶を唯一の頼として、悲壯にも彼は上野を出發した。

が皆掛取に降りて四五丁も行くうちに早ボツリボツリと大粒の奴がやつてきた。東雲と共に雨具に身を固めるとは情ないが仕方ない。それから先は雨一〇〇% 降つたの降りおいの、煙は小川と化し、酒谷は飛瀑を懸け、氣は泡を吹き、帽子のつげは雨滴の簾を卸し、臍を噛まんとすれば早流々と水を堪えたる有様、形容の外である。浦に落ちたらん濡龍の如くあつて辿りついたる神津牧

場、こゝで天に冲する焚火をふして生氣恢復する。此頃より天、一行の熱誠を嘉してか、断雲の間より赫々たる秋光射し初め、妙義の崔巍たる岩峯を指顧の間に望んだ。牧場を初谷鉾泉へと上信国境を越えてゆく道すがら遙かに望み見た日光連山の新雪は美しかった。鉾泉へ着く頃、秋の陽はトツプりと暮れて、降る様ふ星、凍る様ふ月が三日の快晴を裏書してくれた。一杯のビールで彼は倒れた石地藏の如く眠つた。

起床五時、すばらしい上天気だらうと打仰いだ空は意外にも曇つて居たが、夜の明けるとつれて次第に青空をあらはし、六時半、宿を出發する頃は物凄いまでに澄渡つた典型的の秋空にあつた。十一月三日は不思議ふ日和である。荒船不動堂あたりから遙か西に雪の美ヶ原、北アルプス連峯、すぐ間途に浅間山を仰いだ。

荒船の最高点、経塚山からの展望は実に見事だつた。秩父、南、八ヶ岳、蓼科、美ヶ原、北、浅間、奥上州、赤城、武尊、日光——こう数へてくると、見えふいのは台湾、東北、北海道の山位のものだらう。富士の見えぬのが玉に疵である。風は相當強く、樹氷を見る様ふ寒さだつた。降りの路すがら思はず感嘆の声をあげた上星尾の立岩と線ヶ瀧、南牧川の溪谷美も忘れ難い景色だ。恵まれた秋の旅であつた。

八風山から物見山、牧場へかけての高原性の風

光には非常な期待をかけてゐたのであつたが、降りしきる雨と濃霧に全く視界をええざられてしまつたが、雨後の牧場附近の山水のたゞずまいは本で読み、又山友達からいろ／＼きかされてゐた以上に深い印象を残した。晩春は特にいゝだらう。経塚山から黒瀧山へ毛無岩を怪て縦走してみたかつたが、時間の都合で行を他日に残したのとは心残りの一である。近き日に再行を計りたいと考へてゐる。

(七兵衛)

暮の大阪

年の瀬が迫る。暮の日本橋を思ふ。銀座を思ふ。本屋の多い神田の街の華々しさを思ふ。

けれども香檳園の空に、冬の夜千駄木台に仰いだオリオンを又ふつかしく見るよりも、別れて振りかへる金の田と藍の海との境の商船学校は、練習船の帆柱にさつきまであつた一杯の帆がいつのまにかふくふつてゐて、十一月の晴れた日に阪神国道とほがらかふ僕だ。

店の用でよく外へ出される。知らふい大阪の街をあちこちそれと汚い処ばかり歩くのはその横顔を見る事だ。今日は京阪沿線野江にメリヤス屋を訪ねて、場末の街は何処でも汚い。葱と油のどぶ川を澄んだ小川にするよりも、歪んだ屋並みを揃へるよりも、堤を築いて電車を乗せてその先を開

くのがやさしい。

オリイグ色の京阪行きの急行がこの街に停らふいのがせめてものうれしさで。

風呂屋の辻を右に折れて原っぱへ出て、製材所の裏にメリヤス屋はあつた。ネクタイの様ふさるまたを拵へてゐる。アフリカの土人がはくんだ。だから土人はモボかモボが野蠻かだ。それも一度りバプールへ行つてから彼等の足にわたる。大英帝國主義つて奴だらう。

用を済まして出ると原っぱの向ふの堤の上を京阪のオリイグ色が又流れる。窓の上に横文字を白で書いて。日曜だ。武藏野だ。

京阪にも用があるので大きに気を利かして天満の事務所へ寄つて見た。何だかひつせりしてゐると思つたけれど、階段を登つて株式係の戸の前に立つと締切の紙が白かつた。京阪は新京阪を合併したけれど、建物は立派な新京阪に移つたんだ。

天六の新京阪は夜にあつても新京阪の新しい字だけ屋根の上に光らふいもの。人のあふい事務所の廊下の静かふ事は焼ける前の一ツ橋の授業中の廊下だ。もう少しじつとしてゐればゴントレットの音が部屋の中から漏れて来るかも知れふい。小鳥の囀りが庭の芝生から流れて来るかも知れふい。

ぼんやり出ると外は又大阪の雑踏で車に揺られ天六の京阪へ来て六階に登つて株式係の戸を開

けると、この間まで天満の窓口にゐた奴がある。何年もここにゐるといふ顔をしてゐる。何年もここにゐるといふ顔をしてゐるけれど僕に挨拶したんだからそれはうそだ。そいつの肩越しに見降ろす大阪の街は硝子越しのせいもありう冬の陽を一杯吸つて又ほがりがだ。

バツタ

新春と共に輝かしいスキーシーズンの訪れて来たのを同人の爲めに慶賀す。

不思議な事には熊もトンボもバツタもペンギンも狸も狐も、恵まれてゐる年の様に世間から認められる年が訪れふいが、どうしたものか。

幸にして吾人幼にして既に彼等の性、運命を感じし居るが、一つこゝに其の今年の運勢判断を試みて如何にしたら彼等の税^{ウツ}が上がるかを調べて見やうか。

熊。性、温順おれど気儘あり。根気よければ研究心強し、肉食を過すは容貌を害ひ、朝の時間を空費するの心配あり。今年は菜食を主とせば男性を産むべし。無精は将来の栄達を防ぐと知てべし。二月、三月は大吉おれば大いに活躍して外の畑を荒すは可おれども、甘藷のみは取る勿れ、一時に信用を落す憂おればあり。

トンボ。性、快活おれど物に捉はれることあり。

軽快おればスポーツ、勸誘に適す。余りに藥草に止まるは眼病を起すも子孫繁栄にはよし。低く飛ぶに慣れ、ば成功の花を咲見すべし。六月には決して高きを飛ぶ勿れ。飛行機に衝突する恐あればあり。

バツタ。性、勇敢おれど熟慮する長所もあり。

榮育早ければ多感にして詩作に適す。今年は大吉おれど断乎として事を為さねば幸運を取り逃すことあり。優柔不断は相手を狸に蹴られることあると知るべし。

ペンギン。性、無邪気おれど皮肉を好む惡癖あり。

榮育早からずと雖も、食慾旺おればネバリありて評論家、集金屋に好適あり。南方に旅行しても幸運を見ることなし。群がる異性よりは犬おるを撰ぶべし。直ちに男児口を先にして出生せん。

狸。性、怪異おれど潔癖あり。理を重ずれば法律家に適す。余りに化かすは化されると知るべし。今年は今迄の化の皮が皆はげる時に當る。万事後方を顧りみて歩むべし。尻尾を握られる恐あればあり。

狐。性、狡猾おれど人はよし。ごまかす事に長ずれば映画監督に適す。余りに口を喜ぶは根漢と誤解される危険あり。今年も小吉おれば運氣開けて落付けるものあり。これ以上頭はハゲ

ざるものと安心すべし。

(支那票)

消 息

奥野綱重

國際通運株式會社札幌支部に轉勤す。

浦松佐美太郎

要用の為山岳部の鹿島槍行には不参加。

小栗吉雄

支那の商用終りて歸る。

曾田莊太郎

川崎野舊銀行本店勤務とある。

赤城鈴太郎

十一月二十五日より太平生命保險株式會社に入社す。

東京市外中野町川添二八、井上方

森竹五郎

十二月中旬頃より病氣にて欠勤中。

高橋要二

一月二十四日結婚式を挙ぐる事に決定。

中川孫一

安心あれ、七兵衛第二世腹の中で曰

く「近日中に娑婆に出るぞ」。

近藤恒雄

三月頃結婚するとの噂あり。

十二月例會の記

急轉直下奥野が北海道行だと云ふ、例會は忽ち送別會に成る、それも出祭のその晩ふんだ。行を

感にしようと言ふ會の希望と本人の望み通りに會
議室に豆や煎餅糖柑など買集めて、ビールに大い
にとは行かぬがメートルを上げて別れを惜しみ、
六台の自動車をつらぬて上野の駅に行く、格構の
おあつらい向の奴がカバン持後は数尺離れて一群
を為しての行列は蓋し黨首を送る陣笠に似たり。
往年の應援團長七兵衛。指揮の下に新旧一橋会歌
を合唱して万歳の声に送る。

(係)

(今後地方会員の爲に例會其の他會合の模様を
お知らせ致します)

(終り)